

報道関係各位

三井不動産株式会社
東京ミッドタウンマネジメント株式会社



次世代を担うアーティスト・デザイナーを発掘 「Tokyo Midtown Award 2009」結果発表

10月23日(金)～11月3日(火・祝) プラザB1F メトロアベニュー展示スペースにて展示

<Tokyo Midtown Award 2009 グランプリ受賞作品>

アートコンペ

テーマ

JAPAN VALUE(新しい日本の価値・感性・才能)
～ガラスケースへの挑戦～



受賞作：『Stain “Expanse”』

受賞者：藤井 秀全

デザインコンペ

テーマ

Japanese New Gift 日本の新しい手みやげ

<一般の部>

受賞作：
『チョンマゲ羊羹』

受賞者：
南 政宏



<学生の部>

受賞作：
『TOKYO MAKER』

受賞者：
大野 恵利



東京ミッドタウン（事業者代表 三井不動産）が主催する「Tokyo Midtown Award 2009」の入賞作品が13点決定しました。総計1,677点の応募作品の中から、アートコンペではLEDを使った作品『Stain “Expanse”』、デザインコンペでは“ちょんまげ”や“東京”をモチーフにした『チョンマゲ羊羹』、『TOKYO MAKER』がグランプリに選出され、準グランプリ作品、佳作作品と共に、10月23日(金)から11月3日(火・祝)まで、東京ミッドタウン プラザB1Fメトロアベニューにて展示されます。（受賞作品は同スペースにて約半年間展示。ただし、広告掲載時を除く）

また、展示期間中には、来街者投票より決定する一般参加型の「東京ミッドタウン・オーディエンス賞」も実施します（オーディエンス賞受賞作品は、11月3日(火・祝)展示会場および東京ミッドタウンオフィシャルサイトにて発表）。尚、同アワードの授賞式は10月30日(金)に開催します。

「Tokyo Midtown Award」は、東京ミッドタウンが次世代を担うアーティスト、デザイナーとの出会いと応援を目指し、幅広く作品を募集するアワードで、JAPAN VALUE(新しい日本の価値・感性・才能)を創造・結集し、世界に発信し続ける街づくりを進める一環として、昨年度より開催しています。

各部門の詳細や受賞作品に関しましては、次頁以下をご参照ください。

グランプリ 賞金 100 万円

受賞作: 『Stain “ Expanse ”』

受賞者: 藤井 秀全 (ふじい ひでまさ)

略 歴: 1984 年 奈良県出身

2007 年 京都造形芸術大学

芸術学部美術工芸学科卒業

2009 年 京都造形芸術大学大学院

芸術研究科芸術表現専攻修了



作家コメント

(素材: 発光ダイオード、アクリルケース、ミクストメディア)

光が空間や身体に浸透していく感覚を「光の染み」として表現。広がり、混じり合いながら像を成していく「染み」は、鑑賞者や空間を取り込んだ光景を作り出す。

デザインコンペ 『Japanese New Gift 日本の新しい手みやげ』

<一般の部>

グランプリ 賞金 100 万円

受賞作: 『チョンマゲ羊羹』

受賞者: 南 政宏 (みなみ まさひろ)

略 歴: 1978 年 大阪出身

滋賀県立大学

環境科学研究科 卒業



作品コンセプト

武士にとって命の次に大切な「チョンマゲ」がモチーフ。日本ならではの「~してチョンマゲ」という言い回しで、お願いごとをするときにぴったりの手みやげ。

<学生の部>

グランプリ 賞金 50 万円

受賞作: 『TOKYO MAKER』

受賞者: 大野 恵利 (おおの えり)

略 歴: 1987 年 東京都出身

武蔵野美術大学

造形学部視覚伝達デザイン学科在学



作品コンセプト

東京の風景を形造る建造物や名所をモチーフにした付箋紙。

印象的に刻み込まれた東京の風景を書籍に挟めば、自分だけのオリジナルの東京が出来る。

アートコンペ

アートコンペは、「JAPAN VALUE（新しい日本の価値・感性・才能）～ガラスケースへの挑戦～」をテーマに作品を募集（1名（組）につき、1作品案まで）。海外を含む総計355名（組）からの応募があり、様々なジャンルのユニークな作品から、4点の入選作品を選出しました。

入選者には制作補助金100万円が支給され、10月13日（火）よりプラザB1Fメトロアベニューのガラスケース内にて作品の公開制作を実施。10月20日（火）の最終審査により各賞が決定しました。

<アートコンペ概要>

応募期間：平成21年5月7日（木）～7月13日（月）

審査方法：プレ審査 1次審査（書類審査） 2次審査（模型によるプレゼンテーション）
最終審査

審査員：五十嵐 威暢（アーティスト/多摩美術大学客員教授）

児島 やよい（フリーランス・キュレーター/ライター）

清水 敏男（東京ミッドタウンアートワークディレクター/学習院女子大学教授）

中山 ダイスケ（アーティスト/東北芸術工科大学教授）

八谷 和彦（メディア・アーティスト）

協力：TOSHIO SHIMIZU ART OFFICE

デザインコンペ

デザインコンペは、「Japanese New Gift 日本の新しい手みやげ」をテーマに作品を募集。海外を含め、「一般の部」に788作品（応募者600名（組））、「学生の部」に534作品（応募者465人（組））総計1,322作品（応募者1,065名（組））と、昨年を上回る応募がありました。「一般の部」「学生の部」それぞれにつき、「グランプリ」各1作品、「準グランプリ」各1作品の計4作品を選出。審査員各自が選んだ「審査員特別賞」も計5作品選出しました。東京ミッドタウンでは、今後、これらの受賞作品の商品化サポートを行っていく予定です。

<デザインコンペ概要>

応募期間：平成21年5月7日（木）～7月13日（月）

審査方法：1次審査 2次審査 最終審査 全て応募シートの審査による

審査員：小山 薫堂（放送作家/東北芸術工科大学教授）

柴田 文江（インダストリアルデザイナー）

内藤 廣（建築家/東京大学大学院教授）

原 研哉（グラフィックデザイナー）

水野 学（アートディレクター）

協力：東京ミッドタウン・デザインハブ

「東京ミッドタウン・オーディエンス賞」投票受付

展示期間中、来街者投票により「東京ミッドタウン・オーディエンス賞」を決定。投票いただいた方の中から抽選で、デザインとアートの融合空間、ホテル「ザ・リッツ・カールトン東京」でのご宿泊（2名1組）をプレゼント。受賞作品は、11月3日（火・祝）展示会場および東京ミッドタウンオフィシャルサイトにて発表します。

- 受付期間：10月23日（金）～11月3日（火・祝） 各日10：00～20：00
- 投票カード回収場所：プラザB1F インフォメーションカウンター

ご参考：Tokyo Midtown Award とホテル「ザ・リッツ・カールトン東京」の関わり

ミッドタウン・タワーの地上3フロアと最上層部にあるホテル「ザ・リッツ・カールトン東京」では、デザインとアートを重要な要素の一つと考え、内装にインテリアデザイナーが厳選した、土地の歴史や魅力を反映させたアート作品やインテリアデザインを採用しています。今回、「デザイン・アートの街」として、次世代を担うアーティストやデザイナーとの出会いと応援を目指して開催している Tokyo Midtown Award の趣旨に賛同いただき、「東京ミッドタウン・オーディエンス賞」にご協力いただきました。

本件に関するお問合わせ先
東京ミッドタウンマネジメント株式会社 TEL：03-3475-3141 / FAX：03-3475-3144

Tokyo Midtown Award 2009 受賞作品

アートコンペ テーマ『JAPAN VALUE (新しい日本の価値・感性・才能) ~ガラスケースへの挑戦~』

■グランプリ 賞金 100 万円

受賞作：『Stain “Expanse”』

受賞者：藤井 秀全（ふじい ひでまさ）

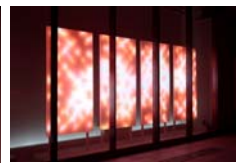
略 歴：1984 年 奈良県出身

2007 年 京都造形芸術大学

芸術学部美術工芸学科卒業

2009 年 京都造形芸術大学大学院

芸術研究科芸術表現専攻修了



(素材：発光ダイオード、アクリルケース、ミクストメディア)

作家コメント

光が空間や身体に浸透していく感覚を「光の染み」として表現。広がり、混じり合いながら像を成していく「染み」は、鑑賞者や空間を取り込んだ光景を作り出す。

■準グランプリ 賞金 50 万円

受賞作：『六本木未来骨董 フクモ陶器』

受賞者：福本 歩（ふくもと あゆみ）

略 歴：1979 年 神奈川県出身

2003 年 多摩美術大学美術学部

工芸学科陶専攻卒業

2005 年 筑波大学大学院

芸術研究科デザイン専攻総合造形分野修了



(素材：陶、他)

作家コメント

あたかも世の中の役に立ちそうなインチキ道具で世間にいやがらせ。それらは全く役にたたない、無駄で邪魔でいらぬもの。

■佳作 賞金 30 万円

受賞作：『自動販売機のある風景』

受賞者：山本 麻璃絵（やまもと まりえ）

略 歴：1988 年 東京都出身

武蔵野美術大学造形学部彫刻学科在学

作家コメント

誰もが通り過ぎていた景色の中の存在感を表現。自動販売機の多い国日本で、観られる以外に役割を持たない木彫によって、改めて自動販売機の大きさや存在感を感じさせ、ありふれた今までの景色を新鮮に。



（素材：楠、アクリル絵具）

■佳作 賞金 30 万円

受賞作：『Funky Project 09 Japan Colors』

受賞者：平田 創（ひらた そう）

略 歴：1973 年 千葉県出身

1997 年 東京芸術大学美術学部

デザイン科卒業

作家コメント

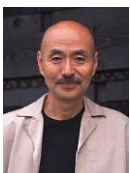
（素材：絵具・インク・ペンなどの彩色画材、布）

ガラスケースを、色彩を創り出す「舞台」として演出。日本の色のイメージをライブパフォーマンスで描きだし、様々な色と形で日本の世界観を表現。



<アートコンペ審査員総評>

五十嵐 威暢 （アーティスト／多摩美術大学客員教授）



全体的に応募作品のレベルが上がったことは嬉しいことでした。テーマの捉え方も広がりを見せて、表現の質に深みが見られます。テクノロジーの罨にはまることなく、手仕事の面白さが受賞作品に多く見られることは収穫であると思います。審査のプロセスが専門誌で紹介されたことも良かったと思います。与えられた設置場所の特性に対して一段の工夫が求められますが、それは次回の楽しみにしたいと思います。

児島 やよい （フリーランス・キュレーター／ライター）



通路のガラスケースは、予想以上に難しいスペースだった。レベルの高い応募作品が揃い、年齢やキャリア、表現方法にも幅があり、難しい審査となった。応募者の皆さんの思いとその可能性を、十分汲み取れるようにと苦心したが、コンセプトはよいものの実現性に疑問を感じる案が多く、惜しいと感じた。制作費をどう使うか、それから実際の展示でどんな設置施工や機材を使用するか、もっと練ってほしい。二次、最終審査に残った作品は甲乙つけ難いものがあり、審査員同士のディスカッションも白熱した。残念ながら今年残らなかった人も、次回以降ぜひ再挑戦してください。

清水 敏男

(東京ミッドタウンアートワークディレクター／学習院女子大学教授)



東京ミッドタウンアワードアートコンペは、2回目を迎えます。ますます充実してきた。このアートコンペの難しさは、作品と同時に展示の提案もすることにある。つまり場所と観客について考えることが求められる。展示は作品の意味の一部を構成し、作品のクオリティに関与する重要な要素である。今回は展示に成功した作品も現れたが、後一步という作品が目についた。いかに作品をアピールするか、各作家にはもっと研究して欲しい。次回が楽しみである。

中山 ダイスケ (アーティスト／東北芸術工科大学教授)



あらためて、ガラスケースは手強いなあと感じました。それぞれの作家が、本当に普段のアート界であたりまえとされる表現手法を断ち切った所から立向わなければ、どんな小細工も、崇高なコンセプトも、この六本木の地下道では無力化されてしまいます。もしかすると、どっぴりとアーティストの方々ではなく、他ジャンルのクリエイターからの目線で提案がなされると、全体的にガラスケースを破ることのできるコンペになるとと思います。

八谷 和彦

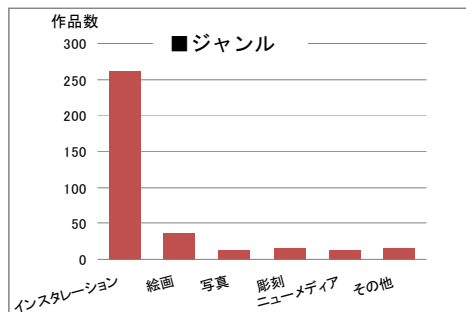
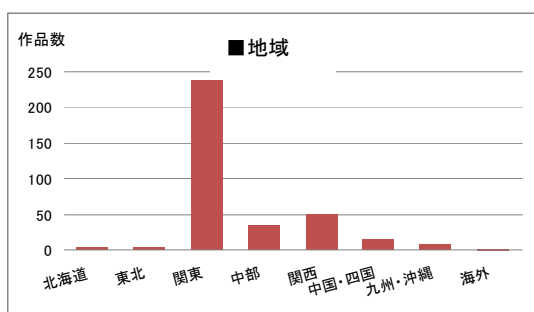
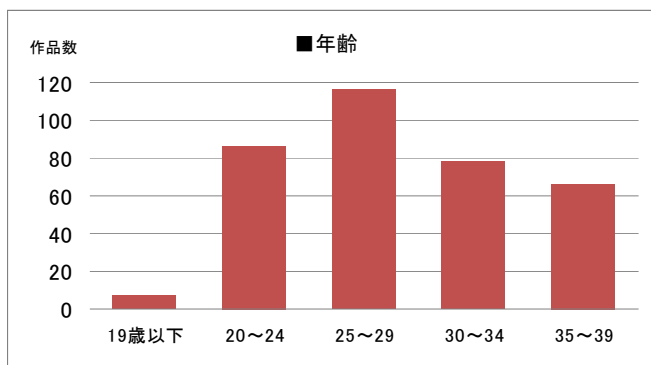
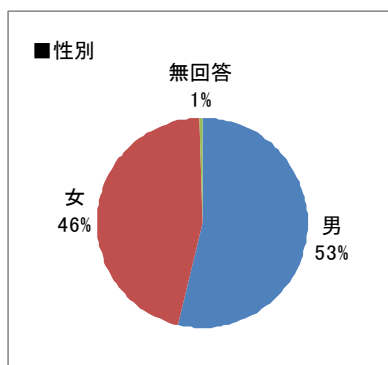
(メディア・アーティスト)



昨年の第一回はグランプリ該当作なし、という残念な結果になったのだが、今年は最後までどちらをグランプリにするのか激論の審査会となった。

藤井秀全さんの作品も、福本歩さんの作品も、いずれも独自の魅力のある作品で、正直グランプリ、準グランプリに（現在のところは）大差はないと思う。だから、藤井さんには「おめでとう」とエールを送りつつも、福本さんの今後にも大いに期待しています。もちろん、佳作の山本、平田さんにも。展示、ご苦労様でした。そして応募してくれてありがとう。

<応募状況>



■応募者数…355名(組)

■平均年齢…28.5歳 (最年少16歳、最年長39歳)

※応募対象年齢(39歳以下)以外を除く

<一般の部>

■グランプリ 賞金 100 万円

受賞作：『チョンマゲ羊羹』

受賞者：南 政宏（みなみ まさひろ）

略 歴：1978 年 大阪出身

滋賀県立大学環境科学部環境計画学科

環境・建築デザイン専攻卒業

滋賀県立大学大学院環境科学研究科修士修了

作品コンセプト

武士にとって命の次に大切な「チョンマゲ」がモチーフ。日本ならではの「～してチョンマゲ」という言い回しで、お願いごとをするときにぴったりの手みやげ。



■準グランプリ 賞金 50 万円

受賞作：『笹船 DISH』

受賞者：塩土 慈恵（しおじ ちかえ）

略 歴：1983 年 石川県出身

女子美術大学芸術学部デザイン学科卒業

作品コンセプト

四季折々の草花をあしらう、世界でも極めて繊細な日本料理の盛り付けをお持ち帰り。お好きなもので、日本らしい盛り付けが楽しめる。



<学生の部>

■グランプリ 賞金 50 万円

受賞作：『TOKYO MAKER』

受賞者：大野 恵利（おおの えり）

略 歴：1987 年 東京都出身

武蔵野美術大学造形学部

視覚伝達デザイン学科在学

作品コンセプト

東京の風景を形作る建造物や名所をモチーフにした付箋紙。

印象的に刻み込まれた東京の風景を書籍に挟めば、自分だけのオリジナルの東京が出来る。



■準グランプリ 賞金 30 万円

受賞作：『EAT JAPAN Candy』

受賞者：田中 千尋（たなか ちひろ）

略 歴：1986 年 神奈川県出身

総合学園ヒューマンアカデミー横浜校

デザインカレッジグラフィック

デザイン専攻在学

作品コンセプト

日本全国 47 都道府県の名産や特産品を小さな飴に詰め込んだ。

日の丸をイメージした紅白のパッケージで、ちょっとしたお祝い事の手みやげに。



<審査員特別賞> 賞金 5 万円

■小山薫堂賞

受賞作：『セッタクロック』

受賞者：馬淵 晃（まぶち あきら）

略 歴：1972 年 東京都出身

日本大学理工学部海洋建築工学科卒業

作品コンセプト

日本特有の履物・雪駄を掛け時計に。日本の文化を新しい形で楽しみ、「一緒に歩いていこう」という思いをこめて渡したいお土産。



■柴田文江賞

受賞作：『Tape Cutter (Ishigaki)』

受賞者：高木 義明（たかぎ よしあき）

略 歴：1960 年 東京都出身

桑沢デザイン研究所卒業

作品コンセプト

石垣に見たてたテープカッター。テープホルダー一部には、四季を表すアイコンの型が抜かれていて、使うたびに桜や竹などの模様がクルクルと回転します。オプションで和歌や家紋を印刷したテープを使うことでギフトや手紙に和のテイストを演出できる。



■内藤廣賞

受賞作：『蕎麦結』

受賞者：加藤 寛之（かとう ひろゆき）

略 歴：1984年 岐阜県出身

東京造形大学デザイン学科

グラフィックデザイン専攻領域卒業



作品コンセプト

日本の「粋」を感じる食べ物といえば蕎麦。木箱に包まれた「蕎麦・の形をしたネクタイ」は、ビジネスシーンやカジュアルシーンにちょっとした「粋」を演出。

■原研哉賞

受賞作：『和柄あめ』

受賞者：高山 真由美（たかやま まゆみ）、伊藤 裕平（いとう ゆうへい）※組での応募

略 歴（高山 真由美）：1985年 栃木県出身

武蔵野美術大学造形学部

デザイン情報学科卒業

略 歴（伊藤 裕平）：1986年 千葉県出身

武蔵野美術大学造形学部

視覚伝達デザイン学科卒業



作品コンセプト

四季のうつろいの中で感じられる自然の姿を、日本人特有の感覚で形象化。

日本の和柄を「あめ」を通じて、目と舌で味わってもらいたい。

■水野学賞

受賞作：『マン額』

受賞者：鈴木 貴子（すずき たかこ）

略 歴：1975年 長野県出身

女子美術大学芸術学部絵画学科卒業



作品コンセプト

世界に誇る日本の文化の一つとなったマンガの背景や吹き出しをフォトフレームに施した。

旅先での出会いで感じる、緊張と感動の連続を表現。

<デザインコンペ審査員総評>

小山 薫堂 (放送作家／東北芸術工科大学教授)



応募総数が去年を上回り、まるでマラソンをしているような非常に残酷な審査でしたが、今年もまた、とても楽しい時間を過ごさせていただきました。素晴らしいアイデアの数々に埋もれるという幸せ・・・応募した全ての皆さんにまず感謝したいです。一方で感じたのが、日本というキーワードから生まれたモチーフのバリエーションの少なさです。相撲、寿司、侍、富士山・・・と、去年同様のモチーフが数多く見受けられました。日本の魅力は、本当にこういうものだけでしょうか？日本という国を見つめ直し、この国の魅力を再発見することからデザインを始める・・・そういう工程の中から新しい何かが生まれてくるような気がします。

柴田 文江 (インダストリアルデザイナー)



昨年と同様に、日本らしさについてわかりやすく表現された作品や、和風のアイコンと現代的なモノを掛け合わせたアイデアが多くみられた。そんな中で高い評価を得た作品のいくつかは、デザイン的な視点をもって「日本」を再構成していたように思える。私の場合は、最終的にモノとして「日本」のイメージが持っている要素を、デザインにまで昇華できたか否かを評価の基準とした。今後、製品化のプロセスの中で、リアリティーを深める方向にデザインの知恵を絞ってほしい。

内藤 廣 (建築家／東京大学大学院教授)



欲しいものがたくさんありました。世の中は少々行き詰まっているかに見えますが、デザインには世の中を明るく楽しくする力があるようです。気になったのは、「手みやげ」という本来なら幅の広いテーマに対して、答えの出し方が類型化していたことです。箸モノと相撲モノが今年の流行です。日の丸モノは定番になりつつあるようです。アイデアの出発点でもっとオリジナリティを模索すべきでしょう。そうでなければ、完成度の高さや洗練の度合いばかりを競うことになってしまいます。デザインの命は、やはり鮮度と自由さでしょう。このコンペが新しい才能の登竜門になることを願っています。

原 研哉 (グラフィックデザイナー)



第一回目の結果が参考事例として機能しているせいか、明るい乾いた“笑い”をモチーフにした作品が増えた。気になったのは、「寿司」や「富士山」や「日の丸」などのお決まりの題材に発想が集中しがちで、おのずとアイデアの重複が目立っていた。

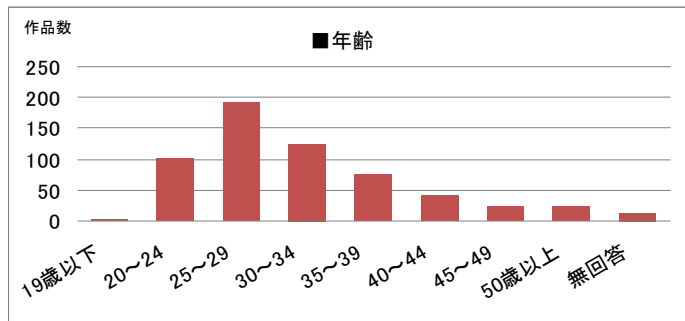
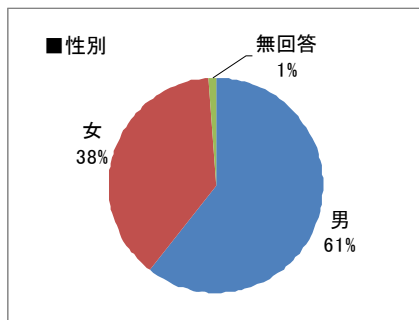
水野 学 (アートディレクター)



「いいものと変わったものは違う」という言葉を大切にしている。デザインというと、兎角変わったことをすることであると思われている節があるが、先日、「普通の普という字には、『並』と『日』の字が入っている」、つまり、お日様というものは誰にでも分け隔て無く降り注ぐものであり、実はそれが一番難しいことでもある、という、とても興味深い話を聞いた。デザインとはまさに「普」でなくてはならない。きっと今回受賞した作品や最終選考まで残った作品は、「普」だったのだろう。デザインという行為自体が、一日も早く「普」になることを願います。

<応募状況>

【一般の部】

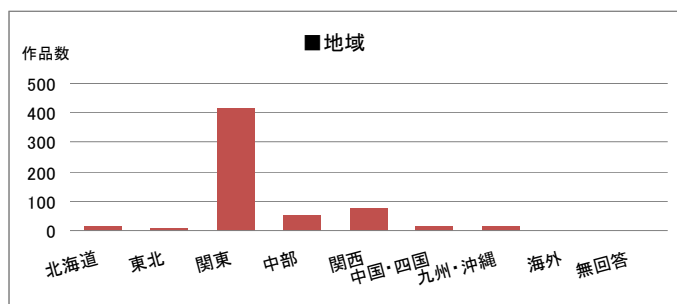


■応募総数…788 作品

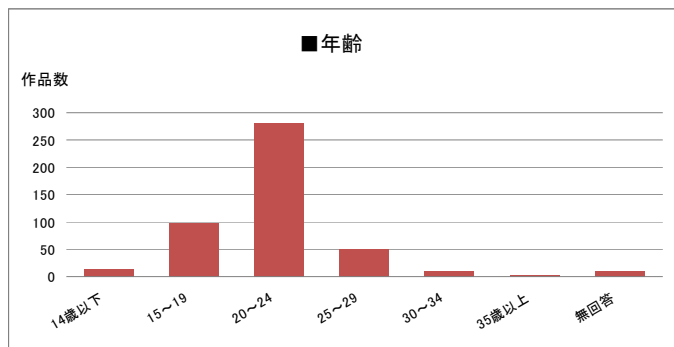
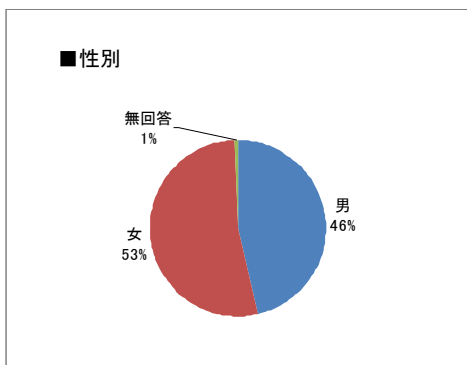
■応募者数…600 名（組）

■平均年齢…31.6 歳

（最年少 18 歳、最年長 69 歳）



【学生の部】

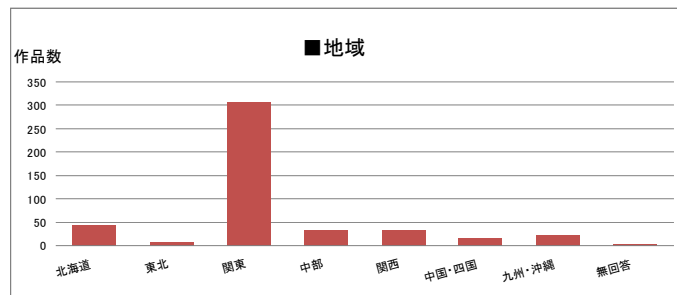


■応募総数…534 作品

■応募者数…465 名（組）

■平均年齢…21.4 歳

（最年少 12 歳、最年長 63 歳）



●アートコンペ、デザインコンペの各受賞作品画像は、以下の URL よりダウンロードいただけます。http://www.tokyo-midtown.com/press/index_press.html

●受賞作品は、10月23日（金）より約半年間、プラザB1Fメトロアベニューのガラスケースにて展示します。（※ただし、広告掲載時を除く）